

吉野の鮎

高木, 市之助

<https://doi.org/10.15017/2556618>

出版情報 : 文學研究. 27, pp.1-20, 1940-07-25. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

文學研究

第二十七輯

(昭和十五年七月發行)

吉野の鮎

高木市之助

| | | | | |
|----------------|-------------------|------------------|-------------------|-------------------|
| 美曳之弩能 み吉野の能 | 曳之弩能阿喩 吉野の鮎 | 阿喩舉會播 鮎こそぞは | 施麻倍母曳岐 鳥へも吉き | 愛俱流之衛 え苦しえ |
| 奈疑能母膝 水葱の下 | 制利能母膝 芹の下 | 阿例播俱流之衛 吾は苦しえ | 伊麻拖藤柯禰波 未だ解かねば | 美古能比母騰矩 皇子の紐解く |
| 於彌能古能 臣の子の | 野陛能比母騰俱 八重の紐解く | 比騰陸多爾 一重だに | | |

これは日本書紀第二十七卷の終近く掲げられてゐる童謡三首の中の二首である。紀に隨へば天智天皇十年の十月十日、天皇御病重らせ給ひ、東宮大海人皇子を召して後事を屬し給うたが、皇子は之を固辭し、天皇の御爲に出家修道せむ事を請ひたまひ、次で天皇の御聽許を得て吉野に入り給うた。一方大津の宮では十二月三日天皇崩御、爾來所謂壬申の亂が展開して行くのであつて、冒頭の二首はかうした崩御殞宮の記事の直後に「于時童謡曰」として遺されてゐるのである。一體記紀歌謡中童謡又は童謡的な由來を有つ歌は他にも相當にあるが、この二首は特にそれらしい

風格を有ち、所謂時人の歸趨を伺ふ事も出来て古代文學史上に重要な意義を有つ歌謡と考へられる。併しながら私がこの小稿で考へたく思ふ事はさうした特に民謡的な性格についてではない。又かうした作品の奥に一例へば信友がその「長良の山風」に於て試みたやうに―何等かの史實を掘出さうといふのでもない。唯當時の文藝のかれこれの關聯に於て我が天武天皇の御像を彷彿し奉りたいばかりである。

ところで肝心の二首の意味に就ては今日まだ定説がある譯ではなく、守部の所謂「いと耳遠くして定かには聞知りがた」⁽¹⁾き状態にある。これ等の諸説について一々紹介批判する代りに、多少の卑見を諸説に参加させる事が許されるならば、前者即ち吉野の鮎の歌で先づ感ぜられるものはその表現意圖に於て鮎と我との對照によつて何ものかを言表さうとしてゐる事である。吾々は類似の表現型を同じ記紀の歌謡の中に幾つも求める事が出来よう。例へば

汝こそは男にいませば云々なこそはおとこにいませば爰こゝもたせらめ

吾はもよ女にしあれば云々 (神代記―須勢理毘賣命)

衣こそ、一重もよき

さ夜床をならべむ君は、畏きろかも (仁徳紀―盤之媛命)

天にこそ、きこえずあらめ

國に、は、聞えてな (雄略紀―尾代)

つまり二物を對照し、前者にこそ、後者にはを添へる事によつて、前者を引あひに出しつゝ主目的たる後者を強調し

ようとする手法である。前例で具體的に言へば、「私は弱い女なのですから貴方の外に男はないのです」といふ主目的を一層強く表す爲に、「貴方こそ男でいらつしやるから方々に妻をお持ちでせうけれど」とうたふのであるが、吉野の鮎の童謡はこの同じ手法によつてゐるのである。即ち「こそ」と「は」にすがつて對照の目標を探して行けば、即ち「我はくるしえ」といふ主目的を強めるために吉野の鮎こそはと引合ひに出したにちがひなく、なぜ「我」が苦しいかといへば、それは「水葱なぎの下芹の下」の爲でなければならず、之に對立してなぜ鮎の場合は苦しくないかといへば、それは「島邊もよき」といふ語の意味に係らなければならぬ。かう考へて來れば「島邊もよき」と「水葱の下芹の下」とは二ヶ所に離れゝゝになつてはゐるが、その實同一の事を別けて表現してゐる事が略想像出來るであらう。語句を適宜還元し大意を要約するならば、「吉野川の鮎こそは島邊(2)の芹や水葱の蔭に棲んでゐるのも結構だらうが、人間の私はこんな山奥の吉野川のほとりに蟄居してゐては苦しくてたまらない」といふ意味になるであらう。してみればこの一首に諷諭されてゐるものは大海人皇子が天智天皇の御本心を察して、吉野に遁れ入り給うた御心境に對する、時人の同情に外ならぬのである。なほこゝで興味のある事はこの童謡の作者が大海人皇子を叙し奉るに際し吉野の鮎を拉し來つた事である。歌の中のわれが大海人皇子である事を表す爲に、その遁れ住みたまふ吉野にゆかりを求めた作意にはいかに民謡らしい神興が感ぜられるが、隨つてこのわれを大友皇子と解する諸説はかうした作意を見落したいみじき誤解である）更に吾々はこの鮎が作者達所謂時人の大海人皇子に對し奉る親愛の心情をよそながら表現しようとする隱微な譬喩關係を看過してはならない。およそ上代歌謡に於て譬喩は譬喩する者と譬喩される者と二つの世界を結ぶ唯一の（といつてもよいほどに重要な）象徴關係を有つてゐる。少くともそれは後世の創作和歌など

に往々にして見受けるやうな空虚な修辭的技巧ではなく、そこに切實な彼等の生の何等かの表現がある事はこの頃の歌謡に親しんでゐる人々にはあまりにも明白な事實であらう。吉野の鮎はこの童謡に於けるかうした譬喩の實證であつて、即ち、吉野の鮎に對する作者の愛着（それは「隼人の湍門の磐も鮎走る芳野の瀧になほ及かずけり」（萬葉集九六〇）などと詠まれた萬葉人の感情からそのまゝ溯つて類推される事であらう）はそのまゝ大海人皇子に對する好感同情の象徴的表現に外ならないのである。さうして本歌が、書紀に隨つて、「時童謡」であつて個人的な創作歌謡でない以上、皇子に奉るかうした親愛の情も亦個人的な感情ではなく、むしろ時人に共通の好感、例へば民意とか或は御人氣（畏多い用語かも知れないが）とかいふに近いものであつたに相違ない。書紀卷二十八に左大臣蘇賀赤兄臣等が皇子を荒道に送りまつつて大津に歸る條に「或曰虎著翼放之」とあるのを信友が時人の語と解したのを通釋の著者が「此の評は時人の語にはあるべからず近江朝廷にして天皇を除き奉らむとの密謀に預りしもの語なり云々。されば此語時人の頃に天皇を惡さまに申したる辭にあらず、我が隱謀のたがひたるを口惜しむが餘りにかゝる語をも發したりしなりけり」（通釋第五—三五〇六頁）と詰つてゐるのは少くともこの童謡の關する限り正しい見解となさざるを得ないのである。

次の「臣の子の」の童謡も亦「さだかに聞き知り難」い事は吉野の鮎と同様であるが、唯一つの手がかりは、こゝにも見られる一つの對立である。尤もそれは吉野の鮎の場合と異なり、漠然ながらも作者即ち時人の或愛憎乃至向背に連なるらしい對立である。この歌の譬喩は「八重の紐」を「解く」事で、それがどのやうな事實を譬へてゐるかによつて諸説が岐れるのであるが、それは姑く措き、さうした八重の紐を解く者が「臣の子」と「皇子」と對立してゐる

る事にまちがひはない。(随つてこの對立を見落した諸説はこの童謡の主たる意圖を逸したといふ意味に於て既にその出發を誤つた見解と言ふべきであらう。)そこで對立の内容を検べてみるに、「臣の子」は一重だに解かない、或は解き得ないのに對して「皇子」は八重の紐を八重ながら解き給ふのである。かうした對立關係は「だに」の雄辯な表現によつて明瞭に分るのであつて、もしかうした表現に乗つて行くなれば、「臣の子」に屬するものは無能であり輕蔑であり不信であり、反對に「皇子」の屬性は萬能であり尊敬であり信頼であると云へはしないか。——少くともこの童謡の表さうとしてゐる主意はかうした鮮かな對立であつてそれ以外の何物でもない。そこで書紀の上述「于時童謡曰」の句に戻り、此の「時」に於ける相對立する者が何かと求めるならば、それは必然に壬申の亂に於ける相對立するものでなければならぬであらう。茲に於て「臣の子」とは近江の御方の臣の子、即ち故松岡靜雄氏の見解のやうに主として蘇賀赤兄臣を指すか或は山田孝雄氏のやうに「大臣有力者」達を指すかでなければならず、一方「皇子」とは「吉野の鮎」の「われ即ち大海人皇子を指し奉る事となるのである。かういふ風に考へて行くと、二首の童謡はその内容に於てはいかにも童謡らしく漠然たるものであるにも係らず、時人の大海人皇子即ち天武天皇に對し奉る親愛と信頼の姿だけは不思議に鮮明であり、かうした角度から窺へば、前者には時人の寵兒として當時の人氣を負はせ給うた皇子の大きな苦しみがのたうち、後者には反對に皇子のかうした苦惱を克服して邁進したまふ洋々たる將來が保障されてゐるのを感じよう。この意味に於て吾々はこゝに我が天武天皇の御像を描き奉つた二枚の簡素な戲畫(といつても頗る好感に充ちた)を有つと言つてはまちがひであらうか。

ところが天皇には、これと見事に照應する、別の二枚の、同じく素描らしい御自畫像があるのである。

天皇御製歌

(天武)

| | | | | |
|---------|---------|---------|------------|---------|
| 三吉野之 | 耳我嶺雨 | 時無會 | 雪者降家留 | 間無會 |
| みよしぬの | みゝがのみねに | ときなくぞ | ゆきはふりける | ひまなくぞ |
| 雨者零計類 | 其雪乃 | 時無がごと | 其雨乃 | ひまなきがごと |
| あめはふりける | そのゆきの | ときなきがごと | そのあめの | |
| 隈毛不落 | 思乍叙來 | 其山道乎 | (萬葉集卷一—二五) | |
| くまもおちず | もひつゝぞこし | そのやまみちを | | |

或本歌

(省略)

天皇幸于吉野宮時御製歌

(天武)

| | | | | |
|-------|---------|--------|---------|----------|
| 淑人乃 | 良跡吉見而 | 好常言師 | 芳野吉見與 | 良人四來三 |
| よきひとの | よしとよくみて | よしといひし | よしぬよくみよ | よきひとよくみつ |

紀曰八年己卯五月庚辰朔甲申幸于吉野宮

二首はその内容から推して共に吉野に關する御製と察せられるが、前者はいかにも沈痛憂鬱であるに對して後者は誠に解放的に明朗である。この點吉野の鮎の童謡のあえぐやうな態度と臣の子の童謡の斷乎とした態度との對照に似てゐる。

さて少しく立入つて二首の御製をみるに、先づ後者即ち「よき人の」の御製には前掲のやうに左註があつてこの御

幸が日本紀記載天武八年五月の記事に該當する由を説明してゐるが、もし之を信するならば（そこには何等疑ふべき理由もなく、随つて諸注皆之を信じてゐる）此の御製は天皇が八年五月五日―七日の行幸に際して詠ませ給うたものとすべきであらう。ところで此度の行幸に關して書紀の詳細な記述に據ると、六日天皇は皇后及び草壁皇子大津皇子高市皇子河島皇子忍壁皇子芝基皇子の六皇子を従へて幸し給ひ、翌七日皇后並びに六皇子に詔して忠誠を盟はしめ給ふと共に御自からも亦御仁慈を盟ひ給ふのである。御盟ひの内情に就ては種々の想像説があるが、皇子の御盟の語の中に吾兄弟長幼並十餘王各出于異腹とあり、天皇も亦朕男等各異腹而生などとのたまふところを見れば皇子御相互の間に多少、圓滿を欠き給ふところがあつたが爲では無かつたか。尤もそれもさしたる御不和ではなく、後年死を賜うた大津皇子にしても當時はまだ十七歳の御若年であるし旁々この御盟ひによつてすべてが解消したのではあるまいか。折柄吉野瀧宮をめぐる初夏清爽の氣は天皇のかうした御盟の後の御心境と映發して一段と快適なものであつたと察せられる。「よき人の」の御製はかうした天皇の行幸の誠に的確な御表現であつて、「よし」の反覆は一步を誤れば修辭の末技に墮する危険があるのに、よくこの危険に堪へて、而かも一方には輕快な同語の重疊と之を率制する「よしといひし」「よきひとよくみつ」などの莊重な字餘りと間に不思議な諧調を奏するところ正に御作者の偉大な御風格の發露に外ならないのである。かういふ風に觀て來ると御製とさきの「臣の子」の童謡との間には誠に偶然でない契合があるのであつて、即ち童謡に於ける作者は御製に於けるよき人と別人でなく、御製に於ける御作者は童謡に於ける皇子と重なり、さうして童謡の作者が皇子に對して「八重の紐とく」とうたつた信賴と御製の御作者がよしとよくみしと嘉みし給うた御信賴とが正に襟と披いて相抱いてゐるのである。

さういへば、恰もこの御製とは對蹠的に沈痛な表情を有つもう一首の御製(みよしぬの)も亦もう一首の童謡吉野の鮎と無縁ではあり得ない。一體この御製で「思ひつゝぞ來し」とのたまうた天皇の御思ひとは何であるかといふ事が最初の問題であるが、諸説は大體に於て之を天皇の誰かに對し給ふ御戀情と見るものと、戀とは全く關係の無い他の御憂愁と解するものと二通りに別ける事が出来る。前者はこの御製が卷十三(三二九三)の類歌に結句「吾はぞ戀ふる妹が正香を」となつてゐる事などから示唆を得たかとも想像されるが、古義をはじめ新考總釋等は全體に於てかうした立場に立つてゐる。後者は御即位の前、大津の宮を辭して吉野に入り給ふ際の御憂苦乃至(御即位後の行幸の際の御作歌と豫想して、)何等か別の御煩悶と考へるのであつて、契沖・眞淵・守部・山田孝雄氏等はそれ〴〵主張の程度や内容に相異なるところはあつてもこの側面に立つた觀方をしてゐる事に於ては同様である。

この問題に對して私は後者、殊に御即位前紀の御吉野入の際の御思ひを叙したものとす諸説に與する者である。なぜか。私は先づ此の御製のかうした理會を妨げようとする種々の支障を芟除して行かなければならぬ。最初の問題は前記卷十三の類歌(三二九三)とこの御製との異同である。卷十三の類歌は同卷の部立によつても分るやうに、明白に相聞に屬する歌であるが、併しこの事實は、そのまゝ御製も亦同様に戀の御歌である事の證とはならないであらう。なぜならば類歌がその成立に際して御製を粉本とした事は略想像が出来るけれども、かうして出來上つた類歌は既に別の歌となり了つてゐるからである。即ち結句を「吾はぞ戀ふる妹が正香を」と作る事によつて歌全體の表現は一變する。御製に於ては「雪は降りける」「雨は降りける」とあり、それが結句の「思ひつゝぞ來しその山道を」に呼應して吉野に於ける天皇の御體驗を叙してゐるのに、類歌の方では、吉野の雨雪は「降るとふ」とよそごとにな

り、「吾はぞ戀ふる」作者の位置が不明となつた爲に、吉野の御金が獄は作者には單なる譬喩の世界でしかなくなつてゐるのである。即ち兩歌の關係は類歌的ではあるが、その意味は全體として別個である。(御製の次の或本歌には雪者落等言、雨者落等言となつてゐるが、上述兩歌の關係から推して行くところの表現は中途半端な矛盾を有つ事になるやうである)とにかく吾々は類歌が戀歌であるといふ事實から逆に御製に戀の意味を類推する理由は毫も認められないのである。なほこれとは別に、御製を戀の部類に入れるには多少とも不自然な節がなくはない。といふのは「隈もおちず思ひつゝぞ來しその山路を」といふ結句を虚心に考へてみるに、もし此の句に何人かに對する思慕の情を托したと解しようとならば、さうした心境は例へば人麿が石見の國から妻に別れて上つて來るとか、旅人が娘子に別れて太宰府の任地を去るとかのやうに、(或はそれほどでなくとも)相當に長い間の別離を豫想せしめるのでは無からうか。ところが天皇の吉野の行幸は、もしも飛鳥の地に都し給うて後の御事とすれば、往復二日の行程で十分であり、現に八年五月の行幸にしても甲申に出立ち給うて翌々日の丙戌には既に車駕還宮とあるし、其他持統天皇紀に見える三十餘回の吉野行幸も多くとも七八日で、唯一回六年七月に二十日に亘る事があるのみである。このやうな近距離且つ短時日の行幸の場合に結句のやうな表現を豫想する事は、勿論不可能ではなからうが、かなり不自然である。

次に御製中の御體驗を即位前紀の御吉野入に擬する事を妨げるものは、萬葉集卷一に於けるこの御製の配列である。即ち御製が「明日香清御原宮天皇代」の部類の中に「天皇御製歌」として掲げられてゐる事は一應不合理に見える。もしも御製が上述のやうに即位前の御體驗を語るものならばこの御製は、例へば天智天皇の七年に蒲生野に於て額田王に答へ給うた「紫のほへる妹を」の御歌の場合のやうに、「近江大津宮御宇天皇代」の部に入れ、標目も「大

海人皇子御歌」とでもあるべきだと一應は考へられるのである。そこで御製に戀ならぬ御思ひを感じ得た諸注の中にも右のやうな配列の不自然に妨げられて御即位前の御體驗と解する事を躊躇し、御即位後に於ける行幸に際しての何等かの御憂苦と想像しようとする考へ方も生じたのであるが、管見に隨へば、配列の問題は必ずしも右のやうに御製の解釋を拘束してはゐないやうである。一體萬葉集中、卷一、二が比較的整理の行届いた部分である事は諸家の齊しく認めるところであつて、隨つてその配列や標題はまづ信賴されてよいのであるが、それならば此の御製には單に「天皇御製歌」とし、次の「よき人の」の御製を特に「天皇幸于吉野宮時御製歌」とことわつたのはなぜであらうか。一般に卷一の諸作歌の標題を檢べてみるに、その成立の時處を明かにし得るものはすべて、例へば「よき人の」の御製のやうに、之を標題によつて提示するのが常である。(尤も額田王の御歌に一首例外があるが(八、「熟田津に」)これは左註に(上略)因製歌詠爲之哀傷とあるにも係らず何等哀傷の意のないところを見ればこの邊集の原形が損はれてゐると見るべきであらうか。七の額田王歌とある標題は一見同様にみえるがこれは例外ではない。説明後出)してみればこの御製も亦「幸于吉野宮時云々」といふ意味の標題がある筈ではないか。尤もこの場合二首の御製の所傳の文献が別々であつた爲に、原文の標題をそれ／＼本集へ持越したといふ解釋も考へられようが、それだけでは比較的整理の行届いた卷一の標題を議する上には不十分であらう、そこで御製の配列と標題とをそのまゝ信賴する限り、吾々に可能な想像は唯一つとなるのであつて、即ちそれは卷一の此の部分の編者が實際この御製を「幸于吉野宮時」の御作と考へなかつたといふ事である。さうしてそれは管見によればそんなに無理な事ではなささうである。即ち、この御製は次の「よき人の」と異なり、天皇が親しく吉野に行幸したまうた時にはなく、飛鳥の宮にまします御平常に於て何か

の機會にまだ生々しい壬申の變の當時を思ひ出でて詠みたまうたと想像するのである。(これは同卷一の七に單に額田王歌として兎道の宮の行幸の御回想の歌を掲げてゐると同一の態度であらう。) 壬申の變が天皇にとつて恐く最大の出來事である限り、天皇が雪につけ雨につけ、かうした當時の苦い御追憶に耽り給うて、之を御製に詠じ給ふのは誠に當然の事で、この當然を當然として認めさへすれば、御製の内容が御即位前の御體験であつても、それは勿論天皇としての御製歌に外ならず、而かも之を次の「よき人の」の御製のやうに「幸于吉野宮時」と説明する事も出來ないのである。加之かうした想像を或程度迄支持するものは御製そのものの内容である。一體此の御製が「よき人の」の御製と同じ行幸に際して作られたとは首肯されない筈がないではない。それは兩首の季節の關聯であつて、「よき人の」の御製が快適な夏の吉野を反映してゐる事は既に考へた事であり、左註も亦之を扶けてゐると言へよう。ところでこの「みよしの」の御製は果して同じ五月の御作歌として通用するであらうか。尤もそれは季節に關係なく三吉野の耳我の嶺の有つ一つの習性を表はしたものとすれば何時何處でもさう詠めない筈はないが、併し歌作の實際に於て、例へば眞夏の日光が録樹を透してさん／＼と降り濺ぐ五月の、しかも瀧の宮にさほど遠くない「その山道」などに人は果して「時なくぞ雪は降りける」とよそ／＼しくうたふかどうかは疑問である。さうしてもし此の御製をかうした「よき人の」の御製と同じ度の行幸から解放し、いつの時にか天皇がそのかみ壬申の亂當時の御吉野入りの御體験を御回想になつたとすれば、季節はよく合つて來るので、天皇が天智天皇の十年に吉野にわけ入り給うたのは冬十月の下旬の事で、佛道修行と稱し給うた以上(或は事實さうだつたかも知れないが)後の行幸に比べれば相當奥深くわけ入り給うた事も想像出來るのであるから、そのさま／＼とした山道に「時なくぞ雪は降りける間なくぞ雨は降りけ

る」事は決して不思議でも何でも無い事なのである。

尤も、もし卷十三の歌の方を規準にして考へればもう一つ別の観方も可能な譯である。即ちみ吉野の某々の嶽と卷十三や本歌で呼んでゐるのは、例の修験道の山伏などが攀ぢのぼつた、もつと遙かに奥の、例へば山上が嶽其の他の峻峯の事で、標高千七百米に近い是等の峰々の事故、「時じくぞ」雪が降り、而かもそれは單に離宮あたりから仰いだだけであるから（果して仰げるかどうか未調であるが）噂らしく「降るとふ」と言つたのに不思議はないといふ觀方である。これは卷十三の歌だけを切離して（或は御製も亦之を本據として派生したものとして）考へる場合には一應尤もであるが、もし逆に御製が眞に御製である事を信じ、之を規準として卷十三の解にも及ばうとする態度に立つならば、かうした解は、實は「その山道を」のそのを通り抜ける事は困難である。なぜならばこの「その」は前後の關係上どうしても「間なくときなく雪や雨が降つたところの山」を指示した言葉でなければならず、さうしてその山道を天皇御自ら「思ひつゝ來」たまふのであるから、兩者は此の御製に於て完全に同一化されてゐなければならぬのである。更に「その山道」は「その山」の「道」でその山は「時なくぞ」雪の降る山であり、道は天皇の「思ひつゝぞ來」たまうた道であつて必ずしも同一に重なるには及ばないといふ風に考へて行く事も不可能ではないが、要するに詭辯たるを免がれないであらう。

次に御製が天皇の現實の御體驗といふよりもむしろ過去の御體驗の御追憶と想像される内證の一つは「その山道を」のそのである。そのはこの場合勿論先行の「時なくぞ雪は降りける云々」を承けて「そのやうな山道」と指示したものの、例へば

たまきはる宇智の大野に馬竝めて朝踏ますらむその草深野（萬葉、卷一中皇命）

のそのに似た意味を有つものと考へられる。併しながらかうしたそのによつて指示されてゐる山道を今しも足下に踏みしめてゐる現實の山道と解する事は「その」の有つ本來の或距離感（文法で遠稱などと呼ばれてゐる）を満足させる所以ではない。前掲「たまきはる」でそのと指してゐるのも草深野が作者にとつて直接知覺の對象でなく、「馬なめて朝ふますらむ」と想ひやる世界に遠のいてゐるからで、こゝにこのでないそのの語感が満足されるのではなからうか。丁度このやうに御製の「その山道」のそのもあるのであつて、唯御製で「思ひ」の主格が天皇御自らである以上この「その」を「たまきはる」の御歌のやうに推量の彼方へ想ひやる事が出来ないとするれば、これを最もそのらしく理會するすべは例へば

ぬばたまのその夜の月夜けふまでに吾は忘れず間なくし念へば（卷七、河内百枝子）

のやうに、「山道」を追憶の世界へ見はるかす事ではなからうか。さう考へて行くと「降りける」のけるにも見逃せないものがあるのであつて、けるだけ切離せば例へば「富士の高嶺に雪は降りける」の場合のやうな、或現在を表す事を否み難いものもあるが、この御製のやうに全體が追憶の世界であるとすれば、この「ける」も亦過ぎ去つた當時の追憶を追憶らしく表現する過去の言葉として見直さなければなるまいし、随つて又「思ふ叙來」の來字も從來「來し」と「來る」と二訓が行はれてゐるが、かうした前後の關係から押して「來し」に傾かざるを得ないのである。餘計な穿索にそれが要するに此の御製の配列も標題も別に御製の御「思ひ」を天皇御即位前の吉野入御の御體驗とする見解を妨げ得ない事を言へば足るのである。

さてこのやうにして種々制約や拘束らしいものを除き、眞に自由の立場に立つて御製そのものを正視して先づ感得出来るものは童謡「吉野の鮎」との關聯である。思ひつゝぞ來しとのたまふ御思ひをこの童謡こそ一番率直端的に指示してゐるのではないか。吉野の鮎に托して「吾は苦しえ」と時人が天皇の御胸中を察し奉つたその苦しみ、それこそは天皇の苦の御像の、外からの素描であり、逆にいへば冬十月の雨雪によつて象徴しつゝ「思ひつゝぞ來し」と天皇御自から追憶したまふ山道、これこそ歴史が記述し童謡がうたふ、天皇の同じ苦の御像の、内からの素描に外ならぬのであらう。

さて天武天皇が右の如く萬葉集の歌人であらせられたといふ事は、天皇の御存在が萬葉の世界と何等かの歴史的關聯を有つ事を想はしめるが、殊に御作が古來量に於てはとにかく質に於てかなり高く認められて來たといふ事實は、かうした關聯も亦萬葉文學の獨自の展開の上に重大な意義を有つ事を想はしめるに十分であらう。私はこの意味に於てもう少し吉野の鮎の行方を見守つてみたいと思ふ。澤瀉久孝氏に隨つて萬葉集の時代を奈良朝の前後に大別し更に各を二期に分けて、第一期を壬申の亂の平定まで、第二期を奈良遷都まで、第三期を天平五年、第四期をその以後とするならば、童謡吉野の鮎等は第一期の終末に、御製二首は第二期の初頭に成つた事となる。隨つて天武天皇の御存在がなにかしら萬葉文學にはたらきかけたとすれば、それは上述第二期を中心としてでなければならぬのである。そこで萬葉に於て第二期とは凡そどのやうな段階であつたかといふに、時代は天武、持統、文武御三代の御治世であり、都は飛鳥淨御原と藤原の兩宮、歌人は舍人柿本人麿によつて代表されると同時に、一方天皇、皇后、皇子、皇女

達皇族の方々がいと賑やかに群れ給ふ段階である。この事は換言すれば一、持統文武の兩帝は天武天皇からすれば皇后と皇孫であらせられ、二、飛鳥地方は大津宮に對して天武天皇の兵を擧げたまうた御根據地であり、三、歌人は皇族は殆どすべて天武天皇に御縁りの方々であり、臣下も亦舍人その他、往年の亂に天皇に附屬し奉つた人々ならぬはなく、要之壬申亂の平定後奈良遷都の行はれる迄、時代的にも方處的にも又人的にも完全に天武天皇を中軸とする段階である。書紀天皇御即位前紀に據れば、天皇は大津宮を辭して吉野に入り給ふや諸舍人を聚めて「我今入道修行せむとす故れ隨つて修道せむと欲ふ者は留れ、若し仕て名を成さむと欲ふ者は還つて司に仕へよ」と諭し給うたのであるが退く者がなく、之を繰返して漸くにして半ば退いたのであるが彼等のかうした天皇への依據信頼はそのまゝ傳へられて舍人柿本人麿の忠誠となつたであらう。又天皇の後妃の中には近江朝と肉親のつながりを有ち給ふ方々も少くないけれども、いづれも天皇の御爲に盡くし給ふと同時に一面此の段階の萬葉歌人として參加し給うたので、その顯著な例は天皇の妃鸕野皇女即ち後の持統天皇であつて、紀に隨へば、妃は天智天皇の第二の皇女でおはしながら天皇の吉野入りにも扈從し、更に天皇と共に東國に避難し給ひ、亂が起るや天皇の帷幕に參じて活躍したまふと共に他面にて多數の御作歌を遺したまうた第二期を代表する萬葉歌人の一人であらせられる。要するに萬葉の第二段階の世界が天武天皇の御存在といかに近く又親しく位置してゐたかは想像に難くない。してみればこの世界に於ける文學自體の展開が天皇の御存在に負ふ事も亦決して少くはなかつた筈であり、それこそ日本文學史の側面から眺めた天皇の御存在の意義でなければならぬのであらう。

一體萬葉集の第二期に於て、換言すれば壬申の亂を界として、特に目立つて考へられる事の一つは吉野の自然が歌

の自然として始めて登場した事である。吉野宮の起原は遼遠であるが萬葉第一期に於て之を詠じたものは殆ど無く、第二期になつて激増するのであるが、かうした現象に天武天皇の御存在が無關係であり得ない事は、弓削皇子と額田王との贈答歌によつても明かである。

吉野宮に幸せる時弓削皇子額田王に贈り與ふる歌一首

古に戀ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴きわたり行く (卷一)

額田王和へ奉れる歌一首

古に戀ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きし吾が念へること

即ち御二人の回想の世界に於て吉野と天皇とがどのやうに緊密に連なつてゐたかを知る事が出来よう。殊に卷一所收幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌と題する二對の長反歌(三六一—三九)は人麿の代表作の一つでもあり、同じやうに吉野を主題とする次期の旅人金村赤人千年等の作歌へ傳統を引く點に於ても注目すべき作であるが、人麿にかうした作を示唆したものは直接には彼が供奉した持統天皇の行幸そのものであらうけれども、間接にはむしろ持統天皇を超えて天武天皇の御存在が考へられないであらうか。有名な過近江荒都時の作歌(卷一二九)が大津宮の廢墟をさぶしむ一面に於て壬申の亂に於ける大津方の人々を吊ふ挽歌である事は、歌中に「上略」大和を置きて、あをによし奈良山を越えいかさまにおもほしめせか云々」と抗議し、(或は少くとも失望し)反歌に於て「大宮人の船待ちかねつ」とか「昔の人にまたも逢はめやも」とか、とかく大宮人や昔の人を問題にしてゐる事によつても感知されるが、當面の吉野宮の歌は觀方によつてはかうした近江の荒れたる都の歌と其の態度乃至感情に於て對立し、大津宮の人々に對す

る挽歌的な氣持は、此の歌に於ける天武天皇の御方の人々に對する頌歌的な氣持を一層鮮明にしてはくれないであらうか。この意味に於て天武天皇の「よき人の」の御製は人麿等の歌の間接ながらも一つの契機として生きてゐるのであつて、人麿は天皇に「よしのよくみよ」と呼びかけられた最もよき一人かも知れないのである。さうして人麿が第二の長歌の方で「行き副ふ川の神も大御食みけに仕へ奉ると上つ瀬に鵜川を立て下つ瀬に小綱さし渡す」と言つてゐるのが、諸注のやうに鮎を捕る爲であつたとすれば、吉野の鮎は偶然にもこゝに再びその潑刺たる姿を表す事になつたのである。要するに萬葉の、殊に第二期に於ける吉野の自然は天皇の「よき人の」の御製を契機として順に人麿から赤人千年金村と展開しつゝその清なる性格⑥を顯現して行つたと見るべきであらう。

萬葉の第二の段階に於てもう一つ目立つてゐる事は「大君」或は「わが大君」が詩の一つの指標として動きはじめた事である。一般に天皇が我が國に於て所謂大君として神ながらおはします事は肇國以來の儼然たる事實であるが、この事實が詩の世界に於て美意識の一つの對象として創造されるに至つたのは、管見に隨へば萬葉時代殊に第二の段階に於てであつた。それは例へば富士の高嶺がどのやうに「天地の分れし時ゆ神さびて高く貴」かつたにしても、この一般的事實が特に詩的創造の世界の事實となつたのは赤人等の時代に始るといふに似てゐる。萬葉に於て「大君」を表現する代表的な成句は周知の如く、「おほきみのみことかしこみ」「おほきみのまけのまに〜」「おほきみはかみにしませば」等々であつて、第四期即ち天平以後になると、その期の指導者格である家持によつて半ば慣用語化しながらもなほ屢々反覆愛用されてゐるのを見受けるし、防人達は恐く専門の歌人等に指導されながらなほ相當の新鮮さを以て是等の語句に自分達の無邪氣な感懷を托する事が出來たのであるが、今かうした表現に副つて萬葉の諸期

を溯つて見ると、謂はゞ「大君」の世界は大體に於て人麿を中心とする第二期の少し彼方で薄れ、それ以前は僅かに「やすみし、我大君」などといふ語彙が、むしろ素材として散見するに過ぎない。即ち大まかに言つて、「大君」を指標とするこのやうな創造は人麿を中心とする第二期の人々に歸する事が出来るやうである。

ところでかうした創造を單に人麿等創造者の側の詩精神の昂揚にのみ歸してよいであらうか。もつと言へば人麿等をしてかうした創造を達成せしめた契機、具體的に例へば人麿をして「大君は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも」(卷三、二四一)と或大君の世界を創造せしめた契機は、少くとも半面に於て、當時の或實在の「大君」に豫想し奉らなければならぬのではないか。この消息は例へば「み吉野の象山の際の木ぬれにはこゝだも騒ぐ鳥の聲かも」(卷、九二四)の創造過程を考へる場合に、之を創造した赤人の半面に、赤人の創造の契機となつた實在の、吉野の象山の際を没却する事が出来ないのと似てゐる。かう考へて來て私は再び、當時の偉大な實在の大君天武天皇に想到し奉らざるを得ないのである。勿論個々の歌に即して言へば各首毎にその歌の主たる大君がいます事は明かである。前例で言へば「眞木の立つ荒山中に海をなす」大君は長皇子であり、又同じ人麿の「大君は神にしませば天雲の雷の上に庵せるかも」詞によつて持統天皇を指し奉る事に異議はないが、(前者には久老のやうな異説もあるけれども)しかもこの「大君は神にしませば」といふ逞しいひびきの眞の主たる大君は單にそれだけであらうか。二首を貫いてもつと擴充した「大君」を把握する事は不可能であらうか。かう考へて私は長皇子や持統天皇を越えた一段高次なるところに、皇子の御父、天皇の御背の君であらせられた天武天皇が人麿のこの創造を可能ならしめ給ふ關聯を想像するのである。もつとも右の例はもつと實際的な證據を提供してくれてゐるので、「大君は神にしませば」といふ句は實

は人麿の創意ではなく、卷十九に大伴御行が壬申の亂の平定後に詠んだと傳へられる

皇は神にしませば赤駒のはらばふ田井を京師になしつおほきみ (卷十九一四二六一)

大王は神にしませば水鳥のすだく水沼を皇都となしつ (卷十九一四二六一)

へ溯る事が出来、さうしてこの題詞を信するならば、吾々がこの文句に索め得る、最古の表現に於ておほきみは文字通りに天武天皇でおはしたのである。

凡そこのやうな關係は人麿の創造に係る「大君」の世界に於て隨所に想像されるところである。例へば日並皇子尊の殯宮の時の作歌に於ける

天地之 初時 久堅之 天河原爾 八百萬 千萬神之 神集 集座而 神分 分之時爾 天照 日女之命

天手婆 所知食登 葦原乃 水穗之國乎 天地之 依相之極 所知行 神之命等 天雲之 八重搔別而

神下 座奉之 高照 日之皇子波 (以下略)(卷二一六七)

といふ一段は、恐く彼の創造に係る「我大王」の一つの極致であつたと思はれるが、この一段の主人公は勿論日並皇子であるけれども、こゝに人麿によつて建立された「おほきみ」の世界の構造の中に、御歴代の大君の御像別けても皇子の父君であり、壬申の亂の御主役であり、文字通りに赤駒の腹ばふ田井を京師になし給うた天武天皇の、いかにも「大君」らしい偉大な御存在を、吾々は肯て豫想し奉らうとするのである。さうして「大君」の世界がこのやうに神話的表現で莊嚴されてゐるといふ事は私のかうした豫想の爲に必ずしも偶然の關係にあるとは考へられないのであ

つて、即ち従來人麿のかうした手法を單に彼が古事記や祝詞から思ひついたものとして一方的にのみ彼の功蹟を讃へるに終つてゐた文學史上のこの出來事は、逆に人麿をしてかうした手法を創造せしめ給うた天武天皇の御存在に内在してゐたとも考へられなくはないのである。御自ら神話と古史に據つて、「邦家の經緯、王化之鴻基」の確立を志したまうた、天皇の偉大な神性の中にこそ、實はこのやうな神話的、歴史的或は古事記的、祝詞的莊嚴を必至とする「大君」が生動して萬葉人或は特に人麿の「大君」の契機となつたといふ考へ方も、亦同時に可能なものではあるまいか。要するに凡そこれらの意味に於て天武天皇の御存在が萬葉の世界に對して必至な一つの史的關聯にあることは明かである、假令それが水葱や芹の下にかくれ棲む吉野の鮎のやうに、むしろ水面下の或隱微な關聯であるにしても。(昭和十一、五、七)

註 1、稜威言別(全集本四八二)

2、(上略)まかぢぬき磯こぎたみつゝ鳥つたひ見れどもあらず云々(萬葉集卷十三—三二二の歌の中の古野川の描寫)

3、紀記論究外篇古代歌謠下(三〇〇)

4、古事記序文講義(八三)

5、み吉野の、御金の嶽に、間なくぞ、雨は降るとふ、時じくぞ、雪は降るとふその雨の間無きがごとその雪の時じきが如間もあちあらず吾はぞ戀ふる妹が正香ただかに(岩波文庫新訓本)

6、拙著日本文學の環境六萬葉文學其三

7、「是は獵路の池造らしゝをりの歌なるべし云々此歌によりておもへば彼池造らしゝは天武の御代の頃をひにや有けん」(槻落葉)

8、古事記序文中の句、山田孝雄氏「古事記の本質」參照